

「 命の安全はこの一歩から 」

愛媛県 宇和島市立城東中学校 2年 細川 萌夏

「怖くて仕方がなかった……。」

いとこの口から出てきたのはこの声。みかんの産地で有名な宇和島市吉田町。自然豊かな山や、海が美しい地域だ。彼女に、とんでもない大災害が襲ってきたのである。異様な音と雨量、押し寄せる土砂。そう、これは2018年7月の早朝に発生した西日本豪雨での出来事だ。

ずっと雨が降り続けている。なんとなく、胸騒ぎがした。当時、8歳だった私であったが、はっきりとした記憶がある。近所の山は斜面がいやな音を立て始めたと思ったら、ごう音と共に、一気に崩れた。その近くの川は氾濫し、道路は水浸しになった。これらの光景を私は忘れることはできないだろう。

吉田町に住んでいたところは、みかん山から崩れてきた土が、大量の水と混じり突然の大規模な土石流になったという。建物を押しつぶすという被害によって亡くなられた方もいた。大雨と土石流によって、避難せざるを得ない状況に陥った方が多く、復旧のための後片付けに追われる生活が長期間続いていた。

いとこの家族は1ヶ月ほど、比較的被害の少なかった私の住んでいる地域に避難してきた。しかし、「早く、家に帰りたい。」と言っていたことを覚えている。恐ろしい体験だったし、寂しくてつらかったんだろう。この土砂災害は大きな被害をもたらした。吉田町を含む宇和島市では、関連死を含め、計13名もの方が亡くなった。

7月は災害が多いと実感した出来事が、今年もまた、発生した。それは12日に起きた松山市内での土砂崩れ。その日、学校は午前中だけの授業だったため、暑さに疲れていた私は、帰ったらすぐに寝てしまった。起きたのは、午後4時半頃。何気なくスマートフォンに目をやると、友人から何件かメールが来ていた。「松山で土砂崩れがあったらしいよ。」大雨が降っていたことは知っていたが、土砂崩れが起きるとは少しも思っていなかった私は戸惑いつつもテレビをつけた。城山の一部が崩れ、土砂が民家に流れ込み、跡形もなく1軒の家が押しつぶされている。近くのマンションにも、木々を巻き込んだ多量の土砂が襲っている、そんな光景が目に入ってきた。

画面に映る「松山城付近で土砂崩れ、3人が行方不明」のテロップ、住宅地になだれ込む土砂、救助活動をする人達。時間を置いてSNSでこの災害について調べてみると、救助活動中にも土砂崩れは繰り返し起こり、警戒に当たっていた消防車すら流されたという。この土砂崩れは、最終的に死者3名という被害を出した。

災害は、いつ起こるか分からない。また、いつ命を落とすかも分からない。「はてしてそうだろうか。」と疑問に感じた。テレビでは毎日の天気予報を発表している。高温になると熱中症注意、台風が近づくとその進路、大きさ、強さなどの情報を伝えてくれている。8月には、南海トラフ地震臨時情報の「巨大地震注意」が1週間NHKで表示されていた。

日本は、山地が国土の6割を占めていて、平地が狭いため、山の斜面や谷の出口など、土砂災害が起きやすい場所にたくさんの人が住居を構えている。これにより、土砂災害が増える原因となる。

では、どうすれば、大規模な土砂災害から自分自身の命を守ったり、被害を少なくしたりすることができるのだろうか。解決のための一歩は、正しい情報を得て、冷静な行動をとることだ。考えをまとめてみよう。

まず、自分が住んでいる地域が土砂災害警戒区域なのか、ハザードマップで確認することだ。市町村で作成されているものを活用しよう。津波、高潮、浸水予想などの防災マップは、地域を知る有効性をもつ。

次に、土砂災害の前兆現象に注意することだ。土砂災害警戒情報と気象庁のホームページにある土砂キキクルの発表も避難所へ行く目安となる。地鳴りがしたり、小石がパラパラと落ちてくるなどといった何らかの前兆現象に気づいたら、周囲の大人に知らせ、いち早く安全な対応をとることが大事だ。

令和6年度 「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

最後は、「日頃の備え」として避難する際に必要な物をまとめておくこと。防災バックやヘルメットを用意していたら、土砂災害だけではなく、地震などでも命を守るために役立ち、安心につながる。家族で話し合い、離れていても会える「集合場所」も決めている。「備え」は、水や食料などの物品だけではなく、心の備えも大切なのだ。

つまり、「いつ」「どこで」「どんな災害」が起こっても落ち着いて、正しく判断することが大切なのだ。災害への対策や備えを万全にするところから始めよう。自分の身を守る行動を知れば、他の人の命を守ることになるのだ。